知識探訪　多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会（JAMS）

「昭南島」で描かれたマンガの中のマレー半島

松岡昌和（秀明大学非常勤講師）

第二次世界大戦期、日本陸軍の占領下に置かれたマラヤでは、現地住民の宣撫（せんぶ）のためのさまざまな施策が行われた。マラヤ軍政の中心であったシンガポールをはじめとして、南方占領地の各地で陸軍によって徴用された「文化人」たちがプロパガンダの任に当たった。その中で、「昭南島」と呼ばれたシンガポールで「文化人」として活動した漫画家に倉金良行がいる。戦後、倉金章介というペンネームで『あんみつ姫』などの作品を残した彼は、戦時期はシンガポールでマンガやイラストレーションなどを描いた。

ここでは、倉金が子ども向け新聞で描いた４コママンガを取り上げたい。『サクラ』と題されたこの新聞は、学校向け副教材として、現地児童に日本語を普及させる目的で編集された。倉金が描いたマンガは、擬人化した動物を描いた一部の作品を除き、マーチャンとレーチャンという名の二人のマレー系児童を主人公としている。当初は日本語学習など２人の日常生活が描かれている（図１）。その後、空白期を挟んで、５回にわたって「マライノタビ」と題するマレー半島の訪問記が始まる。シンガポールのマレー系児童という設定の２人は果たしてマレー半島で何を見るのであろうか。

図１：『サクラ』第１号（1942年６月10日）

「マライノタビ」は、マーチャンとレーチャンが風光明媚なキャメロン・ハイランドとうず高く積まれた錫のインゴットが描かれた絵葉書を眺め、旅心をくすぐられるところから始まる。２人は作者の倉金に旅行したいとねだり、旅が実現する。そして２人は鉄道に乗ってクアラルンプールに向かう。引率するのは軍服姿の青年で、倉金本人かあるいは別の日本軍兵士であるかははっきりしない。

図２：『サクラ』第21号（1943年３月15日）

マレー半島で２人がまず訪れたのは農事訓練所である（図２）。そこでは日本軍兵士によって農業や教練の訓練を受けているマレー人青年と出会う。２人はそのマレー人青年がまるで日本軍兵士のように見えたことに感銘を受けている。続いて、２人はペラの錫鉱山を訪問する。そこで、多くの錫が採掘されるという説明を受け、また採掘跡に多くの水溜りができていることに驚嘆している。その上で、マーチャンがこれだと夜歩いたら危ないという感想を残している。２人の旅は唐突に終りを迎える。地元の親子連れ、また親子の牛を見た２人は帰ろうと軍服姿の青年に持ちかけ、そして連載が終わることが告げられる。

一連の連載で錫が強調されていることから、この戦争が資源の戦争であったことをあらためて示していると見ることもできよう。また、自ら日本語を積極的に勉強している２人のマレー系児童、日本軍兵士のようなマレー人青年の姿は、日本化教育が進んでいるということを示そうとしたものと捉えることもできよう。一方で、描かれた天真爛漫な児童の姿や、こどもたちが主体的に動くという場面設定は、倉金が戦前・戦後に描いた作品の特徴と相似形をなす。この倉金の作品は、戦時期のクリシェに彩られつつも、軍政当局の教育政策や文化政策よりも作者個人の個性が強く表現されたものと言えよう。

＜筆者紹介＞
1979年生まれ。一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程単位修得退学。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員を経て、現在は秀明大学非常勤講師。研究テーマは日本占領下シンガポールにおけるメディア文化政策。主な論文に「娯楽か日本化教育か？―日本占領下シンガポールにおける音楽―」『植民地教育史研究年報』第17号、2015年ほか。

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます